

本紙では、JR総連が1月26日に開催した「第46回定期中央委員会」で、JR東海労の制裁に踏み切る可能性があるかと伝えてきたが、結局のところ、制裁を行うことはできなかった模様だ。中央委員会の内容を伝える「機関紙『JR総連』第307号」等から読み解くに、あくまでJR総連の中での「跳ねっ返り」はJR東海労の地方機関である“新幹線関西地方本部”であり、これには“あくまでJR東海労本部が問題を是正すべき”、というスタンスで臨んでいるようだ。JR総連の近畿地方協議会の定期委員会で“組織破壊行為”を確認していることに鑑みれば、JR総連としても直接的に指導性を発揮すべきものにも思えるが、そういう主体性や当事者能力はないらしい。。。

第46回中央委員会での制裁はできず

JR東海労関西と泥試合を繰り広げるJR総連

定期大会も含め、こうした機関会議は例年であればマスコミにも公開されているが、今回は完全にシャットアウトして開催しており、公開されている情報は多くはない。しかし、参加者からの情報も聞くに、やはりすんなりと終わった訳ではなかったようだ。主催者挨拶を行った山口浩治委員長はもちろん、JR東海労以外の単組選出の中央委員からも、JR東海労新幹線関西地方本部を強く批判する発言が相次いだらしい。こうした実態を明かしたくないからこそ会議を非公開としたのだろうが、春季生活闘争を盛り上げようというこのタイミングに、その方針を決める中央委員会を突如非公開とするのは、連合傘下の産別組織では、はっきり言って異常だ。

この間の公式の場における批判の応酬や新幹線関西地方本部HPにおける詳細事実の暴露、今回の委員会における更なる批判の応酬は、まさしく“泥試合”であり、組織がガバナンス不全に陥っているとしか言いようがない。方針を巡り激しく意見交換を行うといったレベルの問題ではなく、子供じみたケンカのような様相を呈している。

“まとも”な産別組織であれば、こんな状況に陥る前に問題解決に乗り出し、事態を收拾しようとするのが普通だろう。しかし、JR総連は何か後ろめたいことを隠すかのようになり、‘JRサービック労働組合’や‘JR東海労連’の存在を、認めるとも認めないとも読み取れる、煮え切らない態度をとり続け、問題の解決に主体性を発揮していない。それは何故なのか。

JR東海労関西の背後に見えたJRひがし労・堀口氏の影

ここでひとつ面白い情報がある。前述の「第46回定期中央委員会」で発言に立ったJR東労組の加藤誠書記長は、JR東海労新幹線関西地方本部OBの京力正明氏が、JR東労組を脱退してJRひがし労に加入した堀口真明氏に対し、情報提供のメールを送っていたことを暴露し、実質的に内通していたことを明らかにしたようだ。京力氏は、平成5年の暴力事件によりJR東海を懲戒解雇されながらも、その後はいわゆる‘首なし専従’としてJR東海労に残り、JR総連の役員も務めていた大物OBだが、未だに一定の影響力を保っていると見られる。加藤氏は、JR東労組側に堀口氏宛の京力氏のメールが届いたことで内通を把握した旨述べ、さらに新幹線関西地方本部からも2021年3月に堀口氏宛のメールが届いたことを明らかにしたそうだ。

内通の事実もさることながら、JR東労組がこの事実を3年前近くから把握していたのは大きなポイントだ。JR東労組出身の山口委員長らは、JR東労組が掴んだこれほど重要な内容を実は把握していたと見るのが自然ではないか。こう考えると、JR総連がここまで煮え切らない態度を取り、“内部対立”の事実を可能な限り矮小化させようとするのは、JR東労組と対立するJRひがし労、さらには「革マル派」活動家がJR東海労に接触していることを認識しながらも隠そうとしているからではないだろうか。

JRひがし労を指導する「革マル派」活動家・浅野氏のうごめき

JR東労組から分裂したJRひがし労の結成には、西岡研介氏の著書「トラジャ」等で「革マル派」活動家と言われている浅野孝氏が関わったとされる。何度か本紙でも伝えてきた通り、浅野氏はJR貨物労組・関東地方本部に接触しており、これがJR貨物労組本部と関東地本の間における内部対立に発展しているが、今回の事案も同じような構図に見える。結局のところ、浅野氏や浅野氏に影響を受けたJRひがし労の役員らは、JR総連内の不満分子に全国で接触し、分裂を促しているのだ。JRひがし労は、「横断的労働組合の創造」をスローガンに、組織の内外で組織拡大を図っているが、この実践の一つが改めて明らかになったのではないか。

前出の加藤氏は、新幹線関西地方本部に対し、「そんなに嫌ならJR総連から出ていけ」との内容で強く非難もしたそうだが、JR総連としても実はそれが本音ではなかろうか。。。